

青年部と共催で開催！第2回春教組「力量UPセミナー」報告

2003年度春教組行事の最後を飾る行事として、11月7日・14日・21日の3日間にわたって、第2回春教組「力量UPセミナー」を青年部との共催で開催しました。今回は、小牧市立小牧中学校教頭の玉置崇先生をお招きし、「授業を創る！」をテーマに3回連続の講座でご講演いただきました。教師が最も大切にしなければならない「授業」について、玉置先生が実践されたビデオでの授業記録や具体的な教材による模擬授業をもとに、授業を子どもたちどのように創っていくのか、また、そのために必要な教材研究をどのように行うべきなのか、多くの具体的なヒントを私たちに与えていただきました。

どの講座も多くの参加者とともに、「授業の楽しさ」を実感できる充実した講座となりました。

アンケートより

- ・ 講演を聴かせていただいて、「早く学校に戻って子どもたちと楽しい授業がやりたい！」と思いました。そのためには教材研究をもっともっとやらねばと痛感しました。今後も努力をし続けていきたいと思いました。
- ・ 模擬授業を通して、毎日の授業で使える方法、見通しを持って教材研究をしていく必要性の両方を教えていただけて、とてもありがたかったです。
- ・ 「教科書の行間を埋めていく」という教材研究の方法が参考になりました。
- ・ 「子どもの意見・発言に価値を与えてやる」という言葉がとても心に残り、実践したいと思いました。
- ・ 日ごろから見逃している点がよくわかり、「目からうろこ」という感じでした。
- ・ 日々の些細な言葉がけや子どもをつぶやきの活かし方がビデオで具体的に分かりやすく説明してもらえてよかった。
- ・ コンピュータを使うということどうしても敬遠していましたが、いろいろな使い方ができること、また、子どももすごく興味を持つということに、とても魅力を感じました。がんばって使ってみたいです。



講演をする玉置崇氏

連続講座 11月7日(金)「子どもの声と動きで授業を創る技」

子どもの言葉と動きを生かして、知的活動を生み出すために・・・

- ・ 子どもの発言を拾うときなどに、子どもたちとのコミュニケーションをとるためには、教師はものわかりが悪い方がよい(ものわかりが悪いようにわざとふるまう)。言葉のやりとりが広がる。
- ・ 授業は言葉で文化を創る…。教師が言葉の一つ一つを大切にすると、子どもも大切にしていける。
- ・ 教師の発問や指示での子どもの表情や動きを見逃さない。リアルタイムで素早く反応をキャッチして、それらの子どもの考えや発言を引き出していく。
- ・ 子どもの発言の理由を教師は聞きたがるが、どこでそれを聞いたらよいのかタイミングを計って我慢する。
- ・ 子どもの発言が、教師の案から大きく拡がったりずれたりすることがある。この場合、初期の段階でしっかり確認・整理して条件を整備してやることで、子どもたちが混乱しないようにすることが大切。子どもの間違いをそのままとらえるのではなく、それを認めつつ本来あるべき方向へと導く。そのためには教材研究は欠かせない。
- ・ 集団追究が大切である。その中で子どもたちは「うまくいった」「よかった」という実感が残る。
- ・ 教師は子どもの多様で複数の言葉・発言を拾い、つなぎ、生かす。「ここが君と一緒に考えたな！」
- ・ 発問・指示ではない学習の価値を高める“教師の言葉がけ”により子どもの発言を価値づけていくことで、集団追究の質が向上する。「君のようにみんなと違う見方をすると、みんなで授業していく良さがあるんだなあ…。」
- ・ その授業での核心の部分は、教師から出してしまうのではなく、子どもの言葉からまとめへとつなげていきたい。
- ・ 教師の“立ち位置”はとても大切。なぜなら子どもたちの表情や動きをよりよくつかむため。
- ・ 机間観察で子どもたちのアイデアを拾っておいて、全体に広げる。
- ・ 発言が出ないときなどは、つぶやきを聞きに行き、黒板にどんどん書いていくと子どもの考えが残る。

